

## SS1 エコインストラクターの役割

執筆者：広瀬敏通氏(ホールアース自然学校)

自然とのふれあいを求める人々が増加する中、自然体験活動やエコツアーが盛んに行われています。同時に、こうした活動を提供する「ガイド」や「案内人」も、様々な仕組みを通じ、全国各地で育成・輩出されており、「エコインストラクター(本事業内での呼称)」もその一つとして位置づけることができます。ここでは、エコインストラクターに求められる資質や実際の活動例などを参考にしながら、今後果たしていくべき役割について考えていきます。



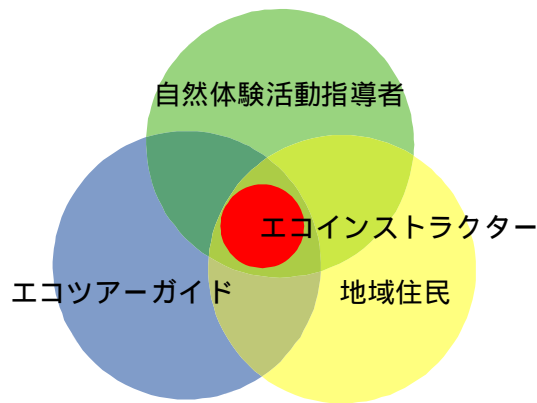
### 1、エコインストラクターとは

わが国では戦前からボーイスカウトやYMCAなどの組織的野外活動が社会性の涵養や人格形成を目的に広く行われてきました。1960年代以降になると、高度経済成長の陰で様々な社会的課題が顕在化するなか、公害問題の高まりとともに自然保護運動が起こり、次いで70年代半ばには自然観察会ブームが巻き起こりました。これらを自然体験活動前史とすると、現在の自然体験活動は80年代に始まった自然学校の取り組みに代表される「自然と人」「人と人」「人と社会」の関係を築き直す運動として広がりを見せてきました。そこでの合言葉は『自然が先生』というもので、社会性の涵養や人格形成以前に、人と自然のよりよい関係づくりに主眼を置いた活動として広がりを持ってきました。また、90年代に入ると、「環境」と「観光」の両立を図りつつ、地域資源の保全や活性化に貢献する運動としてエコツーリズムが始まっています。

ともに、環境問題に向けられた人々の関心、健康的な生き方、地域の自然・文化資源の価値を見直すまなざしが、都市と農山漁村の交流活動や観光産業の新しい潮流とも連動して、確実に日本社会に根付きつつあります。こうしたなか、地域の自然・文化・暮らしを来訪者に体験的に伝え、楽しく学ぶ機会を提供する質の高い人材の育成が急務とされ、全国各地で取り組まれてきました。

「エコインストラクター」は、自然学校インストラクターやエコツアーガイドなどを指す人材として、国による自然ふれあい活動推進の流れから生まれた概念であり、これまでの「ガイド」や「案内人」「インタープリター」なども含まれます。

さらに、現代社会は、従来型のガイドや案内人の枠に留まらず、安全管理や地域資源のプログラム化にまで踏み込んだスキルを有していると同時に、自然の適正利用や事業の企画・広報など、地域貢献につながる視野も持ち合わせる人材、つまり、「地域を元気にする担い手」としてのエコインストラクターを求めています。



## 2、エコインストラクターに求められる資質

エコインストラクターに求められる資質は、単にプログラムを実施したり、自然の中を案内するだけのものではありません。下記に掲げる7つの項目についての「認識」が必要であり、それを日々の活動の中で具体的な「実践」につなげていくことが大事です。

### 1)「理念」

自然体験活動やエコツーリズムが内包する理念や社会的意義は、それを他者に分かりやすく、時には楽しく伝えることによって、社会化されていきます。理念なきガイドは、業務として仕事しているに過ぎず、参加者に対して質の高いサービスを提供できないだけでなく、誤ったメッセージを与えてしまうことにつながりかねません。

また、国内における自然体験活動やエコツーリズムは歴史が浅く、現在進行形であるため、概念も評価も定まったものではなく、つねに社会との連動や立ち位置、役割が変化する可能性をもっていることにも配慮しておく必要があります。

### 2)「伝える技術」

参加者にプログラムを提供することは、エコインストラクターの主要業務です。自らのメッセージを他者に「伝える」ことや、プログラムを通して人と人、人と自然、人と社会を「つなぐ」意味や手法を理解し、それを実践できる資質は不可欠です。

自らのメッセージが他者にしっかり伝わっているかどうかを確かめるには、プログラム実施時の参加者の興味、関心などの度合いや理解度を探ったり、同僚スタッフからのフィードバックが不可欠です。アンケートや反省会などを大切に、担当したプログラム内容の振り返りと改善を十分に行うことで伝える技術のスキルアップにつながります。

### 3)「安全管理」

自然体験活動やエコツアーにおいて、「安全」とは、予定された活動内容が無事に終了することを指します。プログラム中の事故を未然に防ぐためのあらゆる取り組みに加え、不幸にも起こってしまった事故に対して迅速かつ的確な措置をとるための考え方と方法を理解していることが求められます。

そのためには、自らの適切なガイド技術の習熟、フィールドにおける危険箇所の熟知、事故対応の体制づくり、救急措置のトレーニング、保険に関する正しい知識の習得など、日々の努力と経験が必要になってきます。

#### 4)「資源発掘」

エコインストラクターの活動フィールドは自然界にとどまりません。人々の暮らす地域社会も重要なフィールドであると同時に、自然界も「奥山」「里山」「里海」であって、けっして人跡と切り離されたエリアではないのです。深い森もサンゴの海であってもそれを育んできた多くの力の中には先人たちの汗や工夫が見て取れます。見るからに名所、旧跡というものではなくとも、こうした地域に潜在的に潜んでいる様々な資源（自然資源・歴史資源・人的資源など）を発掘し、それを魅力的なプログラムに反映させていくこともエコインストラクターに求められる大切な役割です。

そうした活動によって地域の埋もれていた価値に光が当たり、磨きがかげられること、つまり、地域が再び元気になっていくことこそが、エコツーリズムの目的でもあるからです。

そのためには、継続的な資源調査や幅広い視野で地域の魅力を捉えるスキルが必要であることに加え、得られた資源を良好なプログラムに進化させるノウハウも求められます。

#### 5)「資源管理」

持続可能な地域資源の活用については、自然体験活動やエコツアーを実施する者が常に意識しておくべき課題です。その考え方や方法論に対する理解は、実際のガイド活動の早い段階で習得しておきたいものです。

「資源管理」とは、資源の持つ本来の価値を損ねない状態を保つ努力を指します。そのためには地域住民自身がその価値を理解していくためのさまざまな手法である地元学やセミナー、結いのような共同作業を継続的に行っていくことと同時に、資源価値を損ねない保障を、人々の思いだけに任せるとはならず、客観化、可視化できるように適切な「ガイドライン」を設けることも考えられます。自然体験活動やエコツアーを実施する者は、直接、こうした資源を活用する立場であるため、より強い、資源管理意識と実践が求められます。プログラム中におけるフィールドマナーや「ローインパクト」の徹底など、しっかりと身に付けて活動できるようにしましょう。

#### 6)「事業化」

事業の企画から運営に至る理論を理解していることが「事業化」の前提です。「事業化」こそは、エコインストラクターが自らの経験を活かし、地域に根付いた活動を自らの手で「継続」していく際に最も重視されるスキルです。

自然体験活動やエコツアーは、一回きりの実施ではそれらが持つ効果を十分に発揮することができません。事業化により、継続的な実施を担保することが大きな意味を持ちます。より多くの人々が自然とふれあい、地域の環境や文化への理解・関心を持つきっかけを提供し続けることが、持続可能な社会づくりや地域貢献につながっていきます。

#### 7)「地域貢献」

上記1)～6)が達成されることは、エコインストラクターが、自然体験活動やエコツーリズムを

地域貢献の一環として普及・定着させることでもあります。

豊かな自然環境や地域の生活文化を有効に活用したプログラムが全国各地で展開され、地域が元気になる“源”にエコインストラクターが育っていくことが、この事業に関わっているすべての関係者の思いです。



### 3、エコインストラクターの日々の活動

ここでは、エコインストラクターの実際の活動例を解説します。「プログラムの実施」が表舞台とすると、それを支える幾多もの裏方仕事があり、それら全体が、エコインストラクターの日々の仕事（活動）となります。そのなかには得手不得手や好き嫌いといったものも含まれるでしょうが、どれ一つ欠けても成り立たないのがエコインストラクターの仕事です。苦手なものはそれを克服することで自分の世界が広がることをイメージして、前向きに取り組むようにしましょう。

#### 1)「プログラムの実施」

プログラムの実施は、実際の参加者を前にしてさまざまなメッセージを伝えていく、魅力に富んだ刺激的な活動ですから、自然体験活動やエコツアーを行う者がもっとも好きな活動だといわれます。そしてこの活動がエコインストラクターの最も重要かつメインとなる活動です。フィールドで実際にガイドをしている時間だけでなく、準備段階から終了後の反省に至るまで、大切なプロセスと要素がたくさんあります。



## 2)「企画・広報作業」



プログラムの企画立案や、完成したプログラムの広報作業もエコインストラクターの重要な業務です。ここでの準備段階が不十分のままだと、肝心のプログラムの実施にまで至らずに不催行となり、活動の種が実らないこととなります。

企画や広報に携わるようになれば、自治体関係者や各種の関係機関との打合せに同席することも多くなるでしょう。

## 3)「地域資源の調査」

自分たちのフィールドにどのような資源が潜んでいるのかについて常にアンテナを張り、プログラム化への道筋をイメージすることも大切です。動植物などの自然資源、歴史や地域文化、或いはそこに暮らす人など、幅広い視野での地道な調査が、優れたプログラムにつながっていきます。

このための調査には、資料収集、分析のほかには地元の識者、古老などへのヒヤリング、現場の実踏やモニタリング、各種の勉強会など、幅広い活動と手法が必要です。



## 4)「地域社会との交流」



地域社会はそもそもさまざまな生業の人の共同体ですから、自らもその一員となる思いで臨まない、「よそ者」として相手にされない場合もあります。地域とは仕事での付き合いではなく、ともに暮らす住民同士の立場で付き合うことがルールだからです。そのうえで、地域の人々と交流を持ち、地域社会を知ることはプログラムを企画し実施していくうえで必要不可欠なプロセスとなります。

特に近年は、持続可能な社会へのヒントとして農山漁村の暮らしや一次産業の「六次産業化」が注目されています。このテキストでも述べてきたように、わが国における自然体験活動やエコツアーの活動は、地域と無関係な自然界がフィールドということは有り得ませんから、優れたプログラムというのは基本的に、地域社会の暮らしや生業、文化が関わって生まれたものだという理解をもっておくことが大事です。そのためにも、エコインストラクターは地域社会との良好な関係性を築けるように日々の活動を自己管理していく必要があるでしょう。

#### 5)「手配・事務作業、施設整備」

プログラムの実施は、参加者や地元関係者、機関、旅行者などとの連絡調整や、予約業務、書類作成業務など、多種多様な事務局運営に支えられて成立します。また、キャンプ場や牧場や農地などの施設を保有している事業者にとっては、施設整備、メンテナンス、農作業も重要な仕事になります。自然学校やエコツアー事業者の施設はそれ自体が、その組織のメッセージを体現しているものとなり、ショーウィンドウともなります。参加者がこれから始まるプログラムと初めて出会うスタッフとに期待と前向きな好奇心とを持って臨めるように、事務局の一挙手一投足や施設のイメージがプログラムの成否を決める力を持つことに心を配ってください。



#### 6)「ネットワークへの参画」



同じ志を持つ人々や事業者同士でネットワークを構築し、そこに参画していくことは、一人のガイドでは、また、一事業者としてだけでは果たすことのできない、大きな社会的役割を達成することができます。

国内にもすでにいくつかのネットワークが存在し、多くのガイドや事業者が登録し活躍しています。

### 4、「地域コーディネーター」としての将来

より良い自然体験活動やエコツアーはより良い地域社会が舞台となることで成立します。閉塞した地域社会では、行き詰ったプログラムとなる場合もあり、参加者が楽しく前向きなメッセージを持ち帰ることは困難になります。そのために、自然体験活動やエコツアーの担い手たちは同時に、より良い地域社会を作る担い手となることが求められるのです。

したがって、エコインストラクターとして目指すべき将来像の一つに、地域コーディネーター（或いはプロデューサー）というキーワードを挙げるすることができます。

#### 1) 地域の小さな産業

自然体験活動やエコツアーはそれ自体が大規模に展開されることは少なく、事業規模も産業規模もとても小さいことが特徴です。だからと言って、不当に低い評価をされることは見込み違いでしょう。

例えば大自然観光地でない普通の田舎での自然学校やエコツアーなどへの参加費は旅行費用の3%

前後が相場ですが、一方、往復の交通費を除く50%以上を宿泊、食事、買い物で使うことを見れば、自然学校やエコツアーが行われている地域全体におちる経済効果は決して小さなものではありません。また、自然学校やエコツアーは地域の伝統的な生業や特産物などをプログラム資源とすることで、活力を失っていた地域社会にさまざまな活性化の効果を発揮することができます。

これからの日本社会は大規模な公共投資型の地域開発はなくなる代わりに、地域内で出来るだけ循環する小さな経済、小さな産業が必要とされています。これらを仕掛け、機能させていく演出家＝プロデューサーがエコインストラクターの役割として期待されているもののひとつです。

## 2) 地域資源の保全・管理

活動する地域の多種多様な資源を活用し、楽しみながら自然や文化を体験的に伝えていく先には、その地の資源をいかに保全していくかという課題が発生します。田畑や雑木林、すんだ清流から成る里山的環境の保全には第一次産業の活性化や地域計画の視点が欠かせません。有名なブナ林や湿原を維持するにはオーバーユースの問題を避けて通ることはできないでしょう。また、失われゆく地域文化の伝承には聞き取り調査や史料整理など、地道な作業が必要になります。

エコインストラクターの生業自体がまさにこうした地域資源に立脚していることをみれば、それを不断に保全し、磨きをかけておくことはエコインストラクター事業を成立させていくことと同義です。

## 3) 地域貢献とネットワークづくり

自然体験活動やエコツアーは、単発の事業ではなく継続的に行うことで、より多くの人々が自然とふれあい、地域の環境や生活文化への理解・関心を持つきっかけを提供し続けていくことができます。それを保障するために、事業化（起業）をする必要があるのです。さらにその先には、持続可能な地域社会を作ることや地域への貢献を事業の仕組みとして作っていくことも重要です。

こうした活動はすでに見たように、ガイド一人ではなかなか実現し得ないものですが、同じ志を持つものや同業者が集って、ネットワークを持つことで飛躍的な発展を見ることが出来ます。

このネットワークは特定地域内のネットワークもありますし、全国的なネットワークも存在します。最初は地域内で自分だけがこうした他地域とのネットワークを持っていたとしても、そこに安住せず、地域内で地道に他地域や全国の情報を提供し続け、共鳴者を増やして、地域を動かして行く仕事がないよりも地域を変えていくためには必要となります。

地域社会はある意味で保守的、閉鎖的ですが、その本質はつねにより良い変化を求め続けています。

この担い手は「よそ者、若者、ばか者」と言われるように、地域内でしがらみの無いスタンスを持つ存在が力を発揮しますが、そこまでにはさまざまな壁や衝突も避けられません。しかし、地域内での共鳴者を増やし、地域の小さな声を地道に拾い上げていくことで、孤立を避けて賛同者を得ていく事例は多く知られています。

自らの活動を他の地域に伝え、他の地域の事例を自らに活かす。そして、全国各地で子どもたちの歓声が響き、大人たちが自らの暮らしを見つめ直すことができる。そうした地域社会づくりにもエコインストラクターが地域コーディネーターとして働いてほしいと期待します。